

第2分科会 個に応じた指導の充実（特別支援学校の取組）
 テーマ「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」

提案2 「安心して学校生活を送るための支援の在り方」
 ～見通しをもつ力を育む取組を通して～

発表者 愛媛県立宇和特別支援学校 教 諭 角藤 裕美
 司会者 愛媛県立今治特別支援学校 教 諭 東 愛
 助言者 徳島県立総合教育センター 指導主事 白桃 智子
 特別支援・相談課

I 実践に当たって

1 学校の状況

本校は愛媛県西予市にあり、内子町以南一帯を校区とする南予地方で唯一の特別支援学校である。知的障がい部門と聴覚障がい部門・肢体不自由部門があり、所属する知的障がい部門には小学部、中学部、高等部の児童生徒187名が在籍している。

2 対象生徒の様子と設定理由

対象の生徒は自閉症である。自分の思いと違っていたり活動に見通しがもてなかったりするとパニックになり、人や物をたたき、自分の頭や肘を机に打ち付けるといった行為が見られる。また、保護者は「一日のスケジュールを理解して見通しをもてるようになってほしい。穏やかに楽しく友達や先生と学習に取り組んでほしい」と願っている。そこで、生徒が将来地域でいろいろな人と関わりながら働くことを見据え、見通しをもって活動することを積み重ね、落ち着いて活動に取り組むことができるように支援を行った。

II 実践内容

1 作業学習における実践

生徒の個別の教育支援計画の目標は「活動内容が分かって落ち着いて活動する」である。そこで生活単元学習の目標を「見通しをもって落ち着いて活動する」と設定し、本校独自の部別研修シート（資料1）を利用してPDCAサイクルに基づいて支援及び授業の改善に取り組んだ。

本学級は中学部2年生の男子3名、女子1名の計4名で構成され、社会性、認知面、コミュニケーション面など生徒の実態は様々であり、実態には幅がある。4名が一緒に授業をする上で、興味・関心をもって意欲的に学習することができるもので、見通しをもって活動できる内容を考え、年間計画及び授業案を作成した。

令和2年度 部別研修シート			
*PDCAサイクルに基づいて、検証（検証）している子供の目標と学習評価を考慮する必要があります。そして、改善→P→D			
学 部	中学部	学 生	2 対象とする児童生徒の氏名
個別の教育支援計画の目標		・すること分かって、落ち着いて活動する。	
各学期の個別の指導計画の目標（おぼろい）		＜日常生活の指導＞ ・見通しを持って落ち着いて活動する。	
＜項目 or 教科名＞			
教科等	作業学習	単 元	授業を定ように
本児に本単元定つけた力 ・見通しを持って落ち着いて作業をする力。			
本児の本単元における目標 ・初めて行う活動や、いつも違う作業の視座でも落ち着いて活動する。			
支援・配慮 ・本人が分かるようにイラストを用いて作業の視座を視覚化する。 ・初めて行う活動は、写真やイラストを用いて説明したり、手本を示したりする。			
②C→A			
項 目	主な内容に対して	授業形態に対して	時間に対して
評 価	◎ ・ 不達	◎ ・ 不達	◎ ・ 不達
児童生徒の 変 容 ・初めて活動に対して、イラストを用いたり手本を示したりすることで活動を拒否したり怒ったりすることなく落ち着いて活動するようになった。			
目標に対する コメント ＜A・B・C・D＞ ・学校生活全般において落ち着いている日が多いもあってか、急な変更や初めて行う活動に対する意欲が次第に増加し見通しをすることが多くなった。事前の説明が本児にとって大切であり有効であることを痛切に感じた。			
改善案 ・イラストだけでなく、ドローブトーカなど誰が説明しても同じ伝え方ができるものも利用していきたい。			

〈資料1 部別研修シート〉

授業では、活動の最初に今日の流れを簡単な言葉と、文字・イラストや写真を使用して説明を行った。終わった活動から順番に活動の文字を消し、今どこまで進んでいる、あとは何の活動が残っているのかを自分で確認できるようにした。また、タイムタイマーを使用して視覚的に時間が分かるようにした。一斉の説明では理解が難しい活動の場合は、個別に手順書を用いて説明を行った。初めて行う行事の説明も同じ手順で行った。

対象生徒は園芸班に所属しており、2年目ということで簡単な言葉での説明のみで落ち着いて活動をしている。授業中、急に場所を変更することもあったが簡単な言葉の説明で理解し、変更を受け入れた。また、初めて行う活動はイラストと文字や簡単な言葉で説明をし、生徒が納得してから始めることで落ち着いて活動をした。



〈作業学習の様子〉

昨年度は「畑に着いたら作業をする前にトイレに行くというルーティン」だったが、今年度は「休憩時間にトイレに行くようにすること」を目標として、スモールステップで取り組んでいる（PLAN:計画）。

支援の手立てとしてまず今までの流れをイラストで説明した（DO:実行）。次に今日からどうするのかをイラストと簡単な言葉で説明した。最初は「草を3本引いたらトイレに行くよ」次時は「草を10本引いたらトイレに行くよ」「籠の半分（線を引いておく）まで引いたらトイレに行くよ」という具合に除草する数を増やした。また、タイムタイマーを使用し徐々に作業時間を伸ばした。初日はすぐにトイレに行けないことに納得できず、教師に対して頭突きをしたり、たたいたりしたが「3本引いたらトイレに行こう。草引きするよ」と伝えたと怒りながらも3本草を引き、チーフの教師に報告をしたので称賛した。次時以降、教師の言葉掛けを聞いて作業量を受け入れるようになった。作業担当教師と支援について話し合いをし（CHECK:評価）授業に取り組んでいると（ACTION:再検討）、生徒が作業途中に「あーい」と言いながらトイレの方を指差し、トイレにいつ行けるのかを確認する行為が見られ始めた。教師が「籠一杯、草を引いたらトイレに行こうね」と伝えたと、笑顔でうなずき、作業場所に戻るようになった。活動内容や作業量が分かり、作業を終えたら「次に何かあるのか」という見通しをもつことができた。具体的な「見通し」をもつことで、長期のルーティンになっていたことの変更も受け入れ、落ち着いて活動できるようになることが分かった。

2 生活単元学習における実践

授業では生活単元学習で押し絵の正月飾りを作ることにした。この単元は手先を使った細かな作業や、印を意識して作業する部分が多いことなど、生徒4人の課題を盛り込むことができるとともに、少し頑張ることで課題を達成し作品を完成させることができる。活動内容は同じ手順で行うことが多く、また、作業量が目に見えるため、見通しをもって活動しやすいことから題材として取り上げた（PLAN:計画）。発達段階が違ふどの生徒にも分かりやすく伝えるためにどの程度の話し方や提示をすればよいのか試行錯誤した結果、簡単な言葉とイラストや写真を用いた説明が伝わりやすいことが分かり、活動内容を簡単な言葉とイラスト

くなった。学校では授業や行事等の見通しをもつことにより生徒が落ち着いて活動できることが増え、穏やかに過ごすようになった。そのことによりマスクの着用や8年間続けた文字のなぞり書きから視写への移行など、嫌なことや苦手なことでも自分で折り合いをつけ、受け入れられるようになってきた。現在はICTを利用して、自分の意見を他人に伝えることに取り組んでいる。言葉でのやりとりが難しい生徒だが、タブレット端末を用いて号令を掛けたり、朝の会の司会を行ったりする時の表情は生き生きとしており、主体的に活動をしている。タブレットの操作に慣れてきたので、イラストと音声を組み合わせたアプリの使用など、誰にでも分かる気持ちの伝え方を模索していきたい。



今後の課題は二つある。今回の実践は生徒と担任の日々の関わりを通して得た信頼関係があってこそその結果と言える。今後生徒が誰とでも落ち着いて活動できるようにしていくことが一つ目の課題である。現在自分の気持ちを伝えるためにICTを利用するよう支援したり、多くの教師と関わる機会を設けたりしている。二つ目は生徒自身が課題を発見し、解決していく方法を身に付けることである。そのためには、PDCAサイクルを用いた実践を繰り返し、新たな課題を発見できるように支援していきたい。

〈指導・助言〉

本実践は、自閉症児に対して「構造化」の視点からアプローチすることで、対象児の適切な行動を引き出すことができた実践である。「構造化」のアイデアを用いることは、様々な事柄が理解しやすくなり、見通しをもち安心して落ち着いて生活することを助けることにつながる。この点において、対象児の認知の特性に応じた構造化のアイデア（何を、いつまで、どのようなやり方で）を工夫し実践できたことが対象児の主体的な行動を導き出すに至ったと言える。また部別研修シートの活用により、チームで情報を共有し、客観的に課題を抽出し改善策を講じている点は、学習指導要領の「指導と評価の一体化による授業改善」に通ずるものがあると推察できる。本単元における目標設定が抽象的な表現となっているので、観察できる行動レベルまで具体化することが必要であり、目標の具体化が適切な評価を生み出す。「落ち着いている」とはどのようなことなのか、対象児についてのアセスメントや行動についての課題分析を行うことで、「目標→指導→評価の一体化」を目指した更なる授業改善に期待したい。

「構造化」は、将来に向けてできるだけ「自立」して生活するための補助具となるものである。今後は、手順書等を、教員の介入なく自分一人で活用できるツールに発展させる必要がある。例えば、作業終了時、自主的に次の活動へ移るための仕掛け作りや、生徒から他者へ働き掛ける（援助要求等）手段の獲得が必要となる。後者においては発表者の取組にもあるようにICT機器の活用にも期待できる。高等部卒業後の就労先や生活様式を見据えた上で、自立に向けた効果的な支援を行うと同時に、対象児に合った環境設定を模索し地域へ引き継ぐことがQOLの向上につながるであろう。